

# お茶うけ 第45話

## 「人形はだませない」 - 市橋とし子 -

市橋とし子の人形作りを支えているものは、新しい技法を工夫するたゆみない研鑽と、「人間が大好き」という暖かい心と、作品である人形に向き合う真摯な心であります。

市橋とし子は、師の今村繁子から「桐塑(とうそ)人形」の作り方を習いましたが、さらに工夫を加えて、人の動きをより自由に表現できる独特の技法を考え出しました。

「桐塑」という素材は、おが屑と生麸糊とをこねて作ったもので、もともとは雛人形などを工業的に大量生産する工法に用いられるものでした。人形の体は、こねたばかりの柔らかい桐塑を人形の体形をした木型に入れ、固まったところで木型を外して取り出します。型を使うこの工法では、人形の体の内部は空洞であり強度が必要になるので、桐塑という固まると非常に硬くなる素材を使っていたのです。

市橋の新しい技法は、型を使わずに、人形の姿勢の芯を針金などで形作り、それに布などを巻いて原形を作り、その上に桐塑を塗り固め塗り重ねて成形するというものです。素材に桐塑を使うので、固まると非常に硬く、特に仕上げ作業は力のある大変な作業になりますが、人形の細やかな表情を作り出すことができます。

また、「桐塑人形」は、固まった表面を彫刻刀で丹念に仕上げたあと、胡粉を塗って仕上げられていましたが、後に布紙貼りの技法が加わりました。市橋はさらに、和紙貼りの技法を開発して、より味わいのある人形を作りました。



市橋とし子の人形たちが見せる何気ない素振りに、私どもが暖かさを覚えるのは、市橋が子供の頃から持っていた人間大好きな心が人形に込められているからと思われる。次の一節は、市橋の人柄をよく伝えていきます。

「東京の車屋さんや、大工さんや、日雇いの人が住んでいた下町で育った市橋は、子供好きの思いやりのある優しい少女であった。近所の赤ちゃんをオンブしたり、町内の子どもたちの宿題をみてやったり、お風呂にも次から次にと連れていって、体を洗ってやったりしたのである」

(『人形はだませない - 市橋とし子 -』 田中館哲彦著 P-34～より)

「人間国宝 市橋とし子人形展」の会場の一角で放映されていたVTRの映像の中に、市橋とし子の作業部屋が写り、部屋の柱にペンで書いた「人形はだませない」の紙がさりげく貼ってありました。市橋の真摯な人形作りの原点が、この言葉にあると思いました。

市橋とし子は、「人形審査雑感」の中で、次のように書いています。

「わたしはよくこんなことをふらっと思うのです。人形作りは演出家であり、そして演技者みたいなものじゃないかと。自分の役に四つに取り組み、その人物の奥の奥まで探り役作りする。しかしなりきったかに見えるその役も、探ったあらゆるものをそのまま生で表現するのではなく、あくまでも自分のものとして昇華させ、その人でなくては出来ないものを作り出す、そこにこそ大きな値打ちがあります。それには日常の専門的な勉強の積み重ねの上に、幅広い知識、それにもまして素直な気持ちで真実を見きわめようとする心が根本になければ立派な芸は生まれてこないし、ましてや人を感動させることなど出来ません。このことはなにか人形作りと一脈通じるものがあるように思えてなりません」

(『人形はだませない 人間国宝 市橋とし子人形展図録』 P-172～より)

私はこの文章を書いた市橋の、自己の作業に妥協を許さない厳しさと、他者の目に耐えうる作品を追求するひたむきさに感銘を覚ええました。さらに、「人形はだませない」の言葉は、自己の作品である人形の目にも他者を意識して対峙する、市橋の真剣な心の表れであると思いました。

1907年(明治40年)生まれの市橋とし子は、人形作りを続けています。

(敬称略)

以上

参考資料:

『人形はだませない 人間国宝 市橋とし子人形展図録』

TBS刊 1998年2月11日

『人形はだませない - 市橋とし子 -』 田中館哲彦著

TBS刊 1997年3月10日 第一刷